

さがり垂る。見る人はやす。

立見塞く幕を卸しし

薄あかり。僻目か。あらず。

見よ。子落つ、劔の上に。

さるをなぞ。泣きいざちこそ

聞え來ね。奥津城無言。

鈍き目に衆人見やる。

立見塞く幕を卸しし

薄あかり。肩ぎぬの人

おごそかに汝もと呼びぬ。

第二の子のぼりぬ。落ちぬ。

然あるべき戲のごと

鈍き目にもろ人見やる。

立見塞く幕を卸しし

薄あかり。登りて落つる

子いくたり。鴈かりのはやにへ。

獺かほをは魚うををぞ祭る。

幕の闇とはに贅呼ぶ、

人鈍き目に見る前に。

空洞

うつろなる家こそ立てれ、

つねに行く丘のつかさに。

槌のおと夜晝よるひ絶えず、

月をだに踰えぬあひだに、

天あまそそり立つ杉むらと

178
肩並むる家ぞいできし。

湖の、見はるかしつる

上みれば、晴れたるに虹、

かけわたす長橋。これも

束の間のいささめづくり。

石まがひ白くかがやき、

その影は水にも映り、

中島の赭塗祠

つねよりも小く見えぬ。

見よ、家は空洞なる家。

薄板を重ねだにせぬ

壁打たば、琴の樋のごと

鳴りなまし。見よ、長橋も

ぬり色の一重のさかえ。

人踏まば、日の照す霜、

かがやける色は消ぬべし。

しかはあれどここに寄り来る

千萬の寶の數を

列ねんと、家をぞ作る。

その寶見に来ん人の

便にと、妻問します

彦星のためならなくに、

鵲の橋をもわたす。

疑の心抑へて、

塵泥と崩えん日に逢ふ

うつろなる法を遺しし

いにしへの聖をぞおもふ。

人形ひとがた

うなる子に人の贈りし
 豆ほどの人がたいくつ、
 たひらけき折敷せしきの上に
 立てなんとすれば倒るる。
 立て難きこの人形に

さも似たる「論ろん」いく條じょう、
 あるみ行く舟の卓つくに
 索張なはりて皿置くがごと、
 手つつにも立つとする間に、
 咀はれし手まづ疲れて
 いきの絲やがて絶ゆべし、
 「系統けいとう」は「Tonso」なして。

海のをみな

海の邊に立てり。
身赤裸なり。
足元に伏せる
黒ずめる岩に
かかれる縁の

藻なせるわが髪
風にぞ亂るる。
廣き廣き濱。
紺青の水を
湛ふる海原。
弓なし曲れる
一筋の白き
小々縁は碎け散る

186
波の水沫。

ここたの女子

皆裸なるが

沙に伏すもあり、

波かづくもあり。

眞白き肉むら

あるは黄なる日を

射返しかがよひ、

あるは水の面に

隠れて、しばらく

青魚の背なす

勻をぞ見する。

女子の顔は

いづれもいづれも

笑まひを帯ぶれど、

187
目差ただならず

憎き嘲あざわらひの

色に照り映えぬ。

あなや。そがひとり

馳せ來と見るまに、

右手わが左手に

緊きびしくからみぬ。

振り放たんとす。

離れず。かなたへ

ただ引きにぞ引く、

美しき口を

方けだに見ゆるまで

開ひらきて笑へり。

目石めいし決明けつめいの貝を

返したる如く

きらきらと照れり。

鱗光る

蛇くちまにのひしと

纏まつはれたるにや譬へむ。

わが髪は空そらさまに

立ち、肌粟立つ。

わが右手には利とき

劍つるぎを持ちたり。

さはれ切りつべき

心は起らず。

兵率つはもの率ともふ

人の驅引かひひきに

取る劍のごと、

ただ柵つたをひしと

握り持ちてあり。

われは女子を

見、目をめぐらして

持たる双やいばを見

引かれじとのみぞ
 すまふ。ふと見れば、
 海なる陸なる
 女子の限
 知らぬ詞もて
 嚙りかはして、
 われ等のめぐりに
 輪を作り集ふ。

魚市の如き

腥なまぐさき臭におひ

我鼻を撲てり。

輪はせばまり來ぬ。

わが左手取れる

女の體からだと

輪をなす女の

體と相觸る。

左手引く力

加はり加はる。

波打際へぞ

やうやう引かるる。

わが右手には利き

劍を持ちたり。

輪をなす女をんなも

身にはえぞ觸れぬ。

あな、我はかくて

海のいづくへか

引かれて行くらむ。

直言ちよく

金縁きんぎ目がね、バイシクル。
留守を使へど、まのあたり
歸るを見つと、上がり來る。

「是非高作の掲載を

こたびは許し給はりて
添へん次號の光彩を。」

「生憎何も出來合ひて
あらず、馳や道切りし、
インスピレーション無沙汰して。
」そこを押してぞわれ願ふ。
たとひ詰まらぬ作にても

お名前あれば人は買ふ。」

金縁目がね、バイシクル
人は見掛によらぬもの、
此直言を敢てする。

我百首

斑駒ばこの骸かゝらをはたと抛ちぬ Olympus なる神のま
とゐに

もろ神のゑらぎ遊ぶに釣り込まれ白き齒見せ
つ Nazareth の子も

202
天の華石の上に降る陣痛の断えては續く獸め
く聲

小き釋迦摩揭陀の國に惡を作す人あるごとに
青き糞する

我は唯この菴沒羅菓に於いてのみ自在を得る
と丸吞にする

年禮の山なす文を見てゆけど麻姑のせうそこ
終にあらざる

憶ひ起す天に昇る日籠の内につけたたましくも
孔雀の鳴きし

203
此星に来て栖みしよりさいはひに新聞記者も
おとづれぬかな

或る朝け翼を伸べて目にあまる穢を掩ふ大き
白鳥

雪のあと東京といふ大沼の上に雨ふる鼠色の
日

突き立ちて御濠の岸の霧ごめに枯柳切る絆纏
の人

大池の鴨のむら鳥朝日さす岸に上りて一列に
ゐる

日の反射店の陶物、看板の金字、車のめぐる輻に
あり

惑星は軌道を走る我生きてひとり欠し伸せん
ために

206
重き言ことやうやう出でぬ吊橋を渡らむとして卸
すがごとく

空中に放ちし征箭せきやの黒星に中りしゆるゑに神を
畏るる

脈のかず汝達なむたち喘ぐ老人らうじんに同じと薬師やくし云へど信
ぜず

「友ひとり敢ておん身に紹介す。」かかる樂器に觸
れむ我手か。」

綴ぶみに金の薄はくしてあらぬ名を貼かしたる如し
或人見れば

寡慾なり火鉢の縁に立ておきて煖まりたる紙
卷をのむ

おのがじし靡ける花を切り揃へ束たばに作りぬ兵卒のごと

一夜をば石の上にも寝ざらんやいで世の人の
読む書しよを讀まむ

黙もだあるに若かずとおもへど批評家の餓ゑんを
恐れたまさかに書く

あまりにも五風十雨の序つぎある國に生れし人と
おもひぬ

伽羅は来て伽羅の香か檀は檀の香かを立つべきわ
れは一星せいの火

すきとほり眞赤に強くさて甘き Nisicoree の酒しよ一
人が中は

今來ぬと呼べばくるりとこち向きぬ回轉椅子
に掛けたるままに

うまいより呼び醒まされし人のごと圓き目を
あき我を見つむる

何事ぞあたら「若さ」の黄金を無縁の民に投げて
過ぎ行く

君に問ふその唇の紅はわが眉間なる皺を熨す
火か

いにしへゆもてはやす徑寸わたらずんといふ珠二つまで
君もたり目に

舟ばたに首かうべを俯して掌たねてこの大きさの海を見るがこ
とき目

彼人はわが目のうちに身を投げて死に給ひけ
む來まさずなりぬ

君が胸の火元あやふし刻々に拍子木打ちて廻
らせ給へ

我といふ大海の波汝といふ動かぬ岸を打てど
も打てども

接吻の指より口へ僕へて三とせになりぬ吝な
りき

搔い撫でば火花散るべき黒髪の繩に我身は縛
られてあり

散歩着の控鈕の孔に挿す料に摘ませ給はん花
か我身は

顔の火はいよよ燃ゆなり花束の中に埋みて冷
やすとすれど

護謨をもて消したるままの文くるるむくつけ
人と返ししてけり

爪を嵌む何の曲をか弾き給ふ。「あらず汝が目を
引き搔かむとす。」

み心はいまだおちるず蜂去りてユスモスの莖
ゆらめく如く

まるらするおん古里の雛棚にこの「Fenagra」の人
形一つ

215 り 籠のうちに汝幸ありや鶯よ戀の牢に我は幸あ

わが魂たまは人に逢はんと抜け出でて壁の間をく
ねりて入りぬ

善悪の岸をうしろに神通の帆掛けて走る戀の

海原

好し我を心ゆくまで責め給へ打たるるための
木魚の如く

厭かれんが早きか厭くが早きかと争ふ隙や戀
といふもの

頬ほの尖の厩はせ子こ一つひろごりて面に満ちぬ戀の
さめ際

うまいするやがて逃げ出づ美しき女をんななれども
齒はぎしりすれば

Messalinaに似たる女をみなに憐を乞はせなばさぞ快か
らむ

利とき爪つめに汝なが膚くこそ破れぬれ鎖くさり取る我が力弛
みて

氷なすわが目の光泣き泣きていねし女をみなの項を
穿つ

貌花のしをれんときに人を引くくさはひにと
て學び給ふや

美しき限集ひし宴會の女獅子めいしなりける君か、か
くても

心の目しひたるを選れ汝なまこと金剛不壞の戀
を求めば

220
汝が笑顔いよいよ匀ひ我胸の悔の腫ものいよ
いようづく

此戀を猶續けんは大詰の後なる幕を書かんが
如し

彼人を娶らんよりは寧我日和も雨もなき國に
あらむ

慰めの詞も人の骨を刺す日とは知らずや黙あ
り給へ

富む人の病のゆゑに白かねの匙をぬすみて行
くに似る戀

221
鬪はぬ女夫こそなけれ舌もてし拳をもてし靈
をもてする

222
處女はげにきよらなるものまだ售れぬ荒物店
の筥のごとく

觸れざりし人の皮もて飲まざりし酒を盛るべ
き囊を縫はむ

黒檀の臂の紅蓮の掌に銀盤擎げ酒を侑むる

「時」の外の御座にいます大君の磬咳に耳傾けて
をり

注文すわが心臓を盛る料に炤に堪へむ白金の
壺

拙なしや課役する人寐酒飲むおなじくはわれ
朝から飲まむ

怯れたる男子なりけり Absinthe したたか飲みて
拳銃を取る

ことわりをのみぞ説きける金乞へば貸さず戀
ふると云へば靡かて

世の中の金の限を皆遣りてやぶさか人の驚く
顔見む

大多数まが事にのみ起立する會議の場に唯列
び居り

をりをりは四大假合の六尺を眞直に豎てて譴
責を受く

勳章は時々の恐怖に代へたると日々の消化に
代へたるとあり

とこしへに饑ゑてあるなり千人の乞兒に米を
施しつつも

輕忽きんごのわざをき人よ己しがために我が書かざり
し役を勤むる

「愚」の壇に犠牲いけにえささげ過分なる報を得つと喜び
てあり

火の消えし灰の窪みにすべり落ちて一寸法師
目を睜ひらりをり

寫眞とる。一つ目小僧こはしちふ。鳩など出
だす。いよよこはしちふ。

まじの符を、あなや、そこには貼かさざりきいん櫛じ子を
覗のぞく女をんなの化性

228
書の上にすばかりなる女來てわが讀みて行く
字の上にある

夢なるを知りたるゆるに其夢の醒めむを恐れ
胸さわぎする

かかる日をなどうなだれて行き給ふ櫻は土に
咲きてはあらず

仰ぎ見て思ふところあり蹇の春に向ひて開け
る窓を

何一つよくは見ざりき生を踏むわが足あまり
健なれば

世の中を駈けめぐり尋ね逢ひぬれど喘止まね
ば物の言はれぬ

十字鋏買ひて歸りぬいづくにか埋もれてあら
む寶を掘ると

狂ほしき考浮ぶ夜の町にふと燃え出づる火事
のごとくに

魔女われを老人にして髯長き侏儒のまとゐの
眞中に落す

我足の跡かと思ふ世々を歴て踏み窪めたる
石のきざはし

圓壘の凝りたる波と見ゆる野に夢に生れて夢
に死ぬる民

舟は遠く遠く走れどマトロスは只爐一つをめ
ぐりてありき

222
をさな子の片手して弾くピアノをも聞きてい
ささか樂む我は

Wagner はめてたき作者ささやきの人に聞えぬ
曲を作りぬ

弾じつつ頭を掉れば立てる髮箒の如く天井を
掃く

一曲の胸に響きて門を出て猛火のうちを大股
に行く

死なむことはいと易かれど我はただ冥府の門
守る犬を怖るる

防波堤を踏みて踵を旋さず早や足蹠は石に觸
れねど

284
省みて恥ぢずや汝詩を作る胸をふたげる穢除
くと

我詩皆けしき贓物ならざるはなしと人云ふ或
は然らむ

(明治四十二年五月一日)

大正四年八月三十一日印刷
大正四年九月五日發行

定價金壹圓



著者 森 林 太 郎
發行者 北 原 鐵 雄
印刷者 淺 野 榮 作
印刷所 東京市芝區愛宕町三丁目二番地
東洋印刷株式會社

發行所 東京市麻布區坂下町十三番地
阿 蘭 陀 書 房
發賣所 東京市神田區表神保町三番地
會社 東 京 堂 書 店
振替東京二七〇番

KI-14
-7

47

終